

『汚れた手』と『奇妙な戦争のメモ』のはざま

川 神 傳 弘

I

1948年パリのアントワヌ座で初演を見た『汚れた手』 *Les Mains Sales* はサルトルが政治活動に携わる1個人としての人間の問題を正面から見据えたドラマである。といってもそれは政治の中枢を司どる指導的立場にある人間の問題ではない。communismeの党员として、つまり活動家 militant, 先手 agent として党中央の指令のままに行動するロボットの役割を果たすことを使命とする自分と、感情と理性また知性を具えた生身の1個人である自分との、任務遂行に直面した煩悶と相克の悲劇と言える。言うなればそれは人間意識の dualité 二重性の悲劇であり、意識の分裂を運命づけられた人間のドラマがそこには生じている。

それは、神話に題材を得た古代ギリシャはソフォクレスの『コロノスのオイディプス』や『アンチゴネ』¹⁾の昔から現代に至るまで連綿と継続する、使命を帯びた人間に不可避に付き纏う宿痼のようなものであって、政治という現実主義と、自己の良心という道徳的理想主義の孰れの方向に行く手を定めるべきかの間で逡巡煩悶する人間の姿とも言えるが、また或る意味では主観と客観のせめぎ合う空間の表現とも言える。より具体的には、革命的政治行動に於ける倫理性の問題が『汚れた手』の直接的テーマであるが、サルトルの「存在論」の用語を借用するならば「対自」と「対他」の相克の絵図でもある。サルトル自身はこの2極の孰れに重きを置こうとしているのか、或いはいないのか？そのどちらでもないとする、2者の dialectique を止揚する synthèse (ジンテーゼ) は果して示され得たのであろうか？

また、この作品には副次的テーマとして「知識人の疎外」の問題が奏で

られている。〔労働者・一般大衆〕vs「知識人」の対立構図から如何なるサルトル像が浮上するか？この問題を扱うにあたっては『奇妙な戦争のメモ』をも射程に収める必要があるが、更には当作品のドラマ的背景を為すサルトルの Kommunismus 観をも視野に入れておく必要があるであろう。彼は人民救済のイデオロギーとして唯一 Kommunismus を認めたが、その運動には一線を画し、常に彼我の間に一定の距離を維持し続けた。そのようなサルトルの態度とスタンスを探るにあたり、《全体主義と知識人》の問題に鋭利な分析のメスを振う Tzvetan TODOROV ツヴェタン・トドロフの *L'homme dépaycé* の内容を指標として参考にしつつ、サルトル自身の全体主義に対する態度を解明する足掛かりとしたい。その理由は、現在パリで生活する、成功した知識人トドロフは冷戦時代、いわゆる東側陣営の全体主義体制下ブルガリアに生を享け、少壮期を彼の地で送った人間であり、いはば東側と西側という2つの価値観を比較しながらの生活を余儀なくされた、*dualité*（二重性）を生きた証言者であることによる。

II

サルトルは *Les Temps Modernes* 紙 1956年11月、12月合併号と1957年1月号連載の *Le Fantôme de Staline* 『スターリンの亡霊』で *communisme* 全体の内部に巢食う悪弊を鋭く糾弾している。1956年鬱積したハンガリー労働者の憤懣は、積年のスターリン体制への反抗という形で爆発し、首都ブタペストを中心に市民が蜂起、反乱の様相を呈したが、ソ連赤軍の介入を招き忽ちのうちに鎮圧された。そしてこの、世に言う「ハンガリー動乱（事件）」は様々な意見・論議を全世界的に沸騰せしめ、反スターリニズム運動の国際的拡大の端緒となった。

Le Fantôme de Staline は無論そのハンガリー事件に対するサルトルの解釈と意見の表明であるが、スタンスとして採る所為は、まづはその全体主義的な体制の維持を第一義とする *communisme* の硬直性に対する非難であり、また、こうした批判を通して自らの理想とする社会主義建設を将来に見据えながら、当時のフランス共産党の現状と有り方を是正する目論

見を披歴したものと言えよう。

サルトルは当初ハンガリー労働者による反抗を単なる当自国政治の民主化の要求と看做していたが、事態が混乱を極め、混迷を深めるに及び、その mouvement は反革命であり、右傾化であると断ずるに至るのである。東西の緊張が極度に高まりを見せていたその時代に於いて、こうしたサルトルの“左右史観”で一切の現象を判断する姿勢は或る意味で已むを得ざる仕儀であった。marxisme 以外に marxisme を乗り越える思想を見出すことは不可能とするサルトルにとって、左翼革命は歴史的必然であり、歴史の宿命であり、或る意味で“思想の進化論”の来るべき次なるステップと映じていたからに他ならない。サルトルがこの表明に託したメッセージは如何なるものであったか？以下具体的かつ簡略にその内容を紹介しておこう。声明の結論を彼は次のような言葉で締括っている。

Notre programme est clair : à travers cent contradictions, des luttes intestines, des massacres, la déstalinisation est en cours ; c'est la seule effective qui serve, dans le moment présent, le socialisme, la paix, le rapprochement des partis ouvriers : avec nos ressources d'intellectuelles, lus par des intellectuelles, nous essaierons d'aider à la déstalinisation du Parti Français²⁾.

la déstalinisation est en cours “非スターリン化が進行中” nous essaierons d'aider à la déstalinisation du Parti français “フランス共産党の非スターリン化に尽力する”などの文言が示すように、サルトルは一党独裁の一国社会主義と閉鎖的かつ秘密主義的官僚機構としてのスターリン主義を問題にしている。また P.C.F. (フランス共産党) 幹部の独走や、一般党員の批判や論争を許さぬ党の閉鎖性が指摘されているのである。こうした現象、Le 《socialisme dans seul pays》, ou stalinisme, ne consiste pas une déviation du socialisme, 《一国社会主義》やスターリニズムは必ずしも社会主義の逸脱を意味するものではなく、c'est le détour qui lui est

imposé par les circonstances³⁾状況によって強制された迂回と看做しているのである。つまり、サルトルは理論としてのマルクス主義を否定しているのではない。そうではなくてマルクス主義の理想を追求する国家の政治制度の現状を嘆いているのである。つまり、膠着化した官僚機構と官僚の特権階級化、その内部における序列主義と個人崇拜、或いは一般大衆との隔絶、そこから生じる官僚を頂点として下部まで波及する相互不信、故に結果的に招来される官僚の独裁制強化等々である。とはいえ、残念ながら上記の事実の必然的帰結としての、スターリン体制下の terreur : 恐怖政治の実態や悲惨な camp : 強制収容所の現状についての言及は殆ど無いのである。

旧ソヴィエト連邦の場合、こうした国内の諸問題、諸矛盾から大衆の目を逸らす一つの手段は資本主義世界との戦いを殊更に強調することであった。対外的包囲網や余儀なくされた孤立、西側からの脅威等を必要以上に喧伝することによって国家的ペシミズムを煽り、大衆の不安をスターリンへの個人崇拜に結びつけ、更にその不安のエネルギーを原動力として東欧諸国の半植民地化という軍事行動に出たのである。その行動はペシミズムの突破口として目論まれたが、サルトルはこれを *déviaton* 常軌の逸脱とは見ず、共産主義体制の完成への *le retour* 迂回と看做している。しかしながら、逸脱であれ迂回であれ、こうした一方向な侵攻行動は半ば幻想的なペシミズムからの逃げ道であり、国内の問題・矛盾を糊塗せんが為めの苦肉の策であったと思われるだけに、犠牲となった被侵略国の国民との関係で考えるならば、ソ連赤軍の軍事行動に正当性を認めることは出来ないであろう。

サルトル自身その不当性を認めている。

La force est sa propre preuve ; en 48 on a parié pour elle ; c'est elle, seule aujourd'hui, qui garantit aux Russes la fidélité de la Hongrie⁴⁾.

ハンガリーの忠誠心をソ連人に保証するもの、それは *la force* だけであり、

Du temps de Staline, pourtant, les plaies restaient couvertes. Per-

sonne ne peut douter que les événements de Pologne et de Hongrie ne soient l'effet direct de ce qu'on appelle ici la déstalinisation. Déstalinisation, démocratisation...⁵⁾

こうした体制内の plaies 傷はスターリンの時代覆い隠されていたのであるが、ポーランドとハンガリーの事件を契機としてそれが明るみに出されたものなのであると。

III

Jacques Derrida はサルトルの唱えた知識人の「参加」についてのインタビューに答えて次のような発言をしている。

“サルトルが何についてもその都度意見を述べることを自らに許し、ときとして知識人の名に値する分析・考察・批判や情報提供をせざーとりわけソ連共産主義について彼がしたことを考えています—無責任な仕方で見解を述べていた事実...”⁶⁾

デリダの指摘するポイントは既に少なからず識者が感じていたところである。就中、われわれはサルトルがソ連国内及び東欧諸国に於ける強制収容所の存在に深く立入らない事実を意外に思うのである。そこで我々としてはサルトルが補足しえなかったか、或いは故意に明るみに出すことを避けたと思われる社会主義体制 régime totalitaire の具体的イメージを、自らがその体制内で経験したブルガリア出身の亡命知識人 Tzvetan TODOROV の体験に裏打ちされた分析と考察に仰いでみたい。

トドロフはその著 *L'Homme Dépaycé* の第一章 Originaire de Bulgarie の 1. L'expérience totalitaire (全体主義の経験) に於いて全体主義体制全般に認められるものとして 3 つの構成要素を挙げている。

Traits constitutifs

Trois grandes caractéristiques du régime se présentent au regard de quiconque cherche à l'analyser : 1) il se réclame d'une idéologie ; 2) il use de la terreur pour orienter la conduite de la

population ; 3) la règle générale de vie est la défense de l'intérêt particulier et le règne illimité de la volonté de puissance⁷⁾.

1) この体制は—イデオロギーに依拠する。2) 人民の行動を支配するために恐怖政治を使用する。3) 生活上の一般的規則は個人的利益の擁護と権力意志の無制限な支配である。

以上3点の特徴の内容に今少し深く立入って見ると、1) L'idéologie. Le contenu de l'idéal, l'image de la société parfaite sur terre qui est présentée comme le but de la société réelle, absorbe des influences lointaines : celle du millénarisme chrétien, celle des utopistes de la Renaissance [...] ⁸⁾. そのイデオロギーは現実社会の目標として提示された完璧な社会、はるか昔のキリスト教の千年王国やルネサンス時代、トマス・モアの主張したユートピアなどの影響を孕むイメージがその内容である。

ところで、トマス・モアの『ユートピア』（理想郷）は元来彼が古代ギリシャ語ウ・トポス乃至ウノ・トポスから作った造語であり、その意味は“どこにも無い場所”である。つまり、言葉の発生源の示唆するところは、ユートピアとは現世地上に実現しえないものということである。トドロフ自身次のような感慨を洩らしている。

Vivant dans une société totalitaire, on a tendance à sousestimer l'importance de l'idéologie : tout cela paraît être pures parole en l'air, poudre aux yeux, masque et mensonge, sans le moindre rapport avec la vie réelle. 《Ils》 nous parlent d'un avenir radieux pour tenter de nous faire oublier la grisaille du présent, 《ils》 évoquent le pouvoir du peuple pour cacher leur avidité personnelle de richesse et de privilège.

全体主義的な社会で暮らしているとイデオロギーの重要性を過少評価せざるをえなくなる。イデオロギーは単なる絵空言、煙幕、虚偽であって現

実生活とは何らの関係もないものに思えてくる。当局者達はばら色の未来について語り、我々の陰うつな日常を忘れさせようとするが、彼らが国民の権利に言及するのは彼ら自身の富や特権への渴望を隠すためでしかない、と語っている。更には、

De plus, pour peu qu'on ait un reste de mémoire, on se rend compte que le contenu de l'idéologie, ou du moins l'interprétation concrète des grands principes, varie considérablement d'un moment à l'autre, alors qu'ils sont toujours présentés comme immuables car seuls vrais.

そのイデオロギーたるや、常に真実であるが故に不変不易なものと提示されているにも拘わらず、実際には驚くほど頻繁に変化しているのである。そして、

L'évolution des rapports de l'Union soviétique avec l'Allemagne hitlérienne, à la fin des années trente, ou avec la Chine de Mao, au cours des années soixante, en propose des exemples particulièrement voyants, tirés de la politique extérieur ; il y en avait mille autres autour de nous⁹⁾.

そうした全体主義のイデオロギーのスローガンの変転はヒットラー治下のドイツ、60年代毛沢東の中国とソ連の関係の変遷等に見られるように枚挙にいとまなしの状態なのである。

次に恐怖政治については、la terreur pouvait devenir le moyen pour diriger un Etat au quotidien et contraindre la population à faire ce que veulent ses dirigeants [...] ¹⁰⁾.

恐怖政治は国家をその日常生活のレベルで管理し、指導者の望むように国民を強制する手段として1860年代ロシアの革命家トカチェフやネチャイ

エフらによってその組織的運用の検討が始まっている。更に彼はエルネスト・ルナンを引き合いに出して全体主義国家の特徴を次のように語る。

Ernest Renan, dans ses *Dialogues Philosophiques*, s'approche, singulièrement de ce trait de l'Etat totalitaire : il pense que, pour s'assurer du pouvoir absolu dans une société d'athées, il ne suffit plus de menacer les insoumis des feux d'un enfer mythologique, mais il faut bien instituer un «enfer réel», un camp de concentration qui servirait à briser les révoltés et à intimider tour les autres. Il pense aussi à la nécessité de constituer une police spéciale, faite d'êtres dépourvus de scrupules moraux et entièrement dévoués au pouvoir en place, des «machines obéissantes prêtes à toutes les férocités»¹¹⁾.

無神論の社会では神話的地獄の炎で不服従者を脅迫するだけでは充分でない。《現実的地獄》を設置しなければならない。その意味するところは反逆者を打ち砕き、怯えさせることに役立つ強制収容所と、良心のためらいなしに権力に完全に献身的な人々から成る特別警察である。こうした機関で働く者達は《どんな残虐な行為も平気で行う機械の如き人間》で構成される。

また3)の利権の支配については、

Pour l'habitant de ce pays, la vie ne se déroule évidemment pas selon les principes codifiés dans les slogans officiels, mais selon de tout autres règles : c'est un combat sans merci pour s'emparer d'une meilleure part du gâteau. Ce sont le cynisme intéressé et la volonté de puissance qui régissent la vie quotidienne dans cette société...¹²⁾.

こうした国の住民にとって生活は公的なスローガンに法規化された原則

に則って送られるわけではなく、全く異なる規律に従って営まれる。それはお菓子の最も美味しい部分を奪い取るための無慈悲な戦いなのだ。全体主義の社会の日常生活を支配しているのは欲得づくのシニズムと権力意志なのである。

Le règne inconditionnel de l'intérêt ne renvoie pas à l'idéologie de Marx ni même à la politique de Lénine. En revanche, dès la prise du pouvoir par Staline, il est bien en place.

こうした全面的利権の支配はスターリンの時代に始まっている。

Le communiste typique n'est plus un fanatique, mais un arriviste. Il est prêt à changer de convictions sur commande ; ce à quoi il aspire est le succès et la puissance de sa personne, non la victoire lointaine du communisme. Marx, Lénine et Staline sont bien les trois fées qui se sont penchés sur l'Etat totalitaire dans son berceau et qui l'ont pourvu de ses principales vertus¹³⁾.

そして、こうした局面に至ると典型的共産主義者とはもはや狂言家ではなく出世主義者となる。出世主義者は命令に応じていつでもその信念を変えることが出来る。つまり、彼が熱望するのは彼個人の成功と権力であって、共産主義自体の未来における勝利は眼中にないのである。こうした悪しき状況の生成をその揺籃期から見守り、主要な養分を与えたのはマルクス、レーニンとスターリンである。

最後にこの恐怖政治の有り方の何たるかを締め括るに当たり、トドロフの卓越した分析を披露しておきたい。

La terreur, c'est une menace de mort ou de répression, dont on sait qu'elle n'est pas parole en l'air. Une fois installée dans la société, elle la transforme en profondeur. Dans aucune société les hommes ne se réjouissent spontanément du bonheur d'autrui ; bien au contraire, c'est le malheur des uns qui fait la joie des autres, cette Schadenfreude dont parle (en français!) Montaigne, la

《volupté maligne à voir souffrir autrui》¹⁴⁾.

恐怖政治は死あるいは弾圧による脅迫であり、一旦それが社会に導入されるや、その社会は根底から変質する。この件についてトドロフはモンテニューを引用して、《他人が苦しむのを見ることによるよこしまな喜び》、ドイツ語の Schadenfreude が人間にあって、人は本能的に他人の幸福を楽しまず、逆に人を喜ばせるのは他人の不幸であり、こうした一般的な人間の性情を上手く利用したのが恐怖政治であることを示唆している。また更に、

Dans la société totalitaire, le moyen de faire souffrir autrui — la terreur — est mis à la disposition de tous ; plus même, on est encouragé et loué d'avoir recours à ce moyen. Pour plonger mon prochain (mon supérieur, mon inférieur, mon rival, mon voisin, mon frère) dans le malheur, il suffit de le signaler, de la manière approprié, aux organes du Parti ou de la Sécurité d'Etat (il y a perméabilité de l'une à l'autre institution) . Dès lors, il n'aura plus d'avancement, sera privé de travail, expulsé de logement, déporté en province, enfermé dans un camp, tué peut-être! 《Quiconque voulait, pour une raison ou une autre, envoyer quelqu'un à sa perte, pouvait le faire》, constate un ancien détenu des camps bulgares¹⁵⁾.

恐怖政治は誰れでもが自由に駆使しうるもので、この手段に訴えることは奨励され、称賛さえされるのである。隣人、上司、ライバル、兄弟を不幸の中に沈めようと思えば、党や公安委員会の諸機関に通報しさえすればよい。訴えられた者は直ちに職を奪われ、地方へ追放され、強制収容所に送られて恐らくは殺される。このようにして誰れかを破滅に追い込もうとすれば、誰れでもがそうすることが出来たという、かつて収容所に収監さ

れていたブルガリア人の証言をトドロフは紹介している。

全体主義体制の究極の悪を強制収容所の存在に見るトドロフは、サルトルがその存在に積極的に言及しなかった事実の理由の一つを次の様に見ている。それはレーモン・アロンとサルトルの精神の相貌の対比に窺えるとする。

On a un peu trop tendance à l'assimiler à celle entre politique et science : d'un côté le pur idéologue, qui décide finalement de tout en fonction de ses choix affectifs, de l'autre le spécialiste, le savant, qui a appris à se mettre à l'écoute des faits. Pourtant, Aron est aussi un moraliste. Leur morales, cependant, n'ont pas même origine : Sartre a, en dernière origine, celle du croyant qui adhère aveuglement à un dogme ; Aron professe une morale rationnelle, fondée sur l'idée de l'universalité humaine et maintenue par le débat argumenté¹⁶⁾.

その対比（対立）は政治と科学の対比に准えることが出来る。サルトルは純粋なイデオログで、感情的な選択によって全てを決定する人間であり、アロンは諸事実の聴取から取り掛かることを知った専門家、学者である。どちらもモラリストではあるが、サルトルのモラルは盲目的にひとつのドグマに執着する信仰者の血を引いているのに対して、アロンは人間の普遍性の観念に基づき、論議を経た論拠によって支えられたモラルを表明するのである。よって次のような結論に至る。

C'est pour cette raison que Sartre se soucie peu des faits, alors que leur prise en compte est le premier pas obligé dans la démarche d'Aron.

アロンの議論の進め方が「事実」の確認から始まるのに対して、サルトル

ルは「事実」に殆ど関心を持たないとドロフは語る。晩年のサルトルと極めて深い親交のあった John Gerassi はその著 *Sartre, Conscience haïe de son siècle* 『サルトル、その時代の忌み嫌われた良心』においてひとつの証言を寄せている。

En public, par exemple, Sartre parlait toujours avec un certain respect des apologistes de la bourgeoisie qu'étaient Aron et Lévi-Strauss, alors qu'en privé il les considérait comme de grands médiocres, l'un, laquais de l'impérialisme américain, et l'autre, clerc prétentieux et arrogant dont les idées 《absurdes》 n'avaient pas d'autre but que de berner les autres intellectuels pour les détourner de l'engagement politique⁷⁾.

サルトルは人前ではアロンやレヴィ・ストロースのようなブルジョワジーの擁護者について敬意をもって語ったが、個人的には彼らを偉大なる凡人と看做していた。アロンはアメリカ帝国主義の下僕であり、レヴィ・ストロースは氣どった、横柄な書生にすぎず、彼の《ばかげた》思想は他の知識人達をだまして政治参加を回避せしめる目的以外のものをもたない。

アンガージュマンの理想に燃えていた当時のサルトルの正直な想いと言えるであろう。

IV

『汚れた手』は当時の全体主義体制下の政治活動の一端を正面から扱ったドラマである。若くて純粋な魂の持主の黨員ユゴーは、党の指令で指導者エドレールを肅清しようとするが、政治目的のためとあれば手段を選ばぬ妥協も必要とし、清濁合わせ呑むエドレールの寛仁大度な人格に圧倒され命令を実行することができない。しかし、自分の妻がエドレールの腕に抱かれているのを目撃したその時、やっとユゴーはピストルに手を掛ける

のである。

共産党の教条主義を批判したかに見えるこのドラマの主たるメッセージは、communisme の閉鎖性、その官僚主義的側面を照らし出すことにあり、目的さえ正しければその実現のためには如何なる手段も許されるとするスターリン流の考え方に、ユゴーという知識人の悲劇を借りて反撥した点にあると見る事が出来る。よって、このドラマは或る意味で“知識人の悲劇”という性格を持っている。

例えば主人公ユゴーは様々な問題でエドレールの護衛達と折り合いをつけることができないのであるが、それはエドレールが言うように、ユゴーが余りにも純粹さに固執するからなのである。つまり、『汚れた手』は主たるメッセージとして communisme の全体主義的体制の有り方を問題にしているのであるが、他方この劇作には副次的なテーマ、いわば副旋律として「知識人の疎外」の問題が奏でられている。この問題に関しては『自由への道』*Les Chemins de la Liberté* 第3部『魂の中の死』*La Mort dans l'Ame* (1949年) も一つのエピソードとしてこれを取り挙げている。

『自由への道』の主人公マチウ・ドラリュ（サルトルの分身と見ることが出来る）は兵營に於いて常に労働者階級の兵士と衝突し、理解し合うことがないという形で描かれているが、ここにも“純粹”へのこだわりが介在している。ユゴーのそうした執着は“政治に於いては目的のために手段を選ばない”ことを強いられる〔agent〕手先の使命の達成を阻む要因となる。個人の問題と政治的使命を混同せず切り離して処理することが求められているにも拘わらず、政治は効果・結果優先の問題であって個人の主義主張（ここではモラルの尊重）とは無関係と割り切る事の出来ないインテリの「懦弱」が頭になっている。

主人公 Hugo ユゴーをブルジョワ階級からのみならず労働者階級からも疎外されるインテリに位置付けたサルトルの意図は奈辺にあるのか？また、こうした状況設定によって如何なる効果が、また意味が生じたのか？

〔agent〕手先は逡巡することなしに、直情径行的行動をとることが要求されるが、知識人の場合正義感、良心、思想の問題が常に介在し、単純な

行動に走ることが出来ない。労働者と知識人の相互理解の困難な状況をわれわれは例えば『自由への道』第3部のマチウの姿に求めることが出来るが、主人公と労働者の対決の図式は、実は第2次大戦中サルトルが動員直後に配属された気象観測班の隊員としての体験がその材料となっている。

サルトル没後の2大私的文書 *Les Lettres à Simone de Beauvoir et à quelques autres* (1983) , *les Carnets de la drôle de guerre* (1983, 1995) の内、殊に上記の状況を鮮明に伝える『奇妙な戦争のメモ』からサルトルと労働者階級出身の兵士達との口論の有様を窺い知ることが出来る。Geneviève Idt は *Sartre romancier ; lectures actuelles de l'œuvre romanesques de Sartre*¹⁸⁾ に於いて、サルトルの『メモ』の報告は大きく二種類に分かれており、一つは気象に関するニュース、第二の種類は陣中の日常生活から引き出される幾分コミカルな、自らの自己欺瞞を明るみに出す目企みの茶番劇であり、それは自他の言動の構造分析として最後に数行の文章に要約されて終ると分析している。

サルトルはこうした報告書を主として母親、ポーヴォワール、ターニャ、つまりすべてを女性の読者に宛てて殆ど毎日3通づつ発送している。従って次のような諍いが頻発する。

《Je commence à te connaître, dit Pieter, tu n'aime pas qu'on t'emmerde, tu écris toute la journée et quand ça te plaît d'aller déjeuner seul au restaurant, tu ne nous l'envoies pas dire.》¹⁹⁾

サルトルは人を寄せつけぬ雰囲気一日中ものを書き続け、食事がしたくなれば勝手に一人で仲間にそれを公言して去ってしまう。隊員の中で最も頻繁にサルトルと遣り合うピエテールは何かにつけて彼を批難するのであるが、ここではサルトルが他人と行動を共にせず、超然として常に冷やかである様子を憤懣をぶつけている。こうした単独行動に身を委ねるサルトルの性癖は『自由への道』*La mort dans l'âme*でも酒宴の場面に鮮明に描写される。

マウチ・ドラリュは仲間と一緒に飲もうという誘いを拒否する。するとラテックスという兵士が酔態を演じ、ズボンから一物を引っ張り出す。

Latex sortit son sexe de sa braguette :

—Regarde! dit-il, et tire ton chapeau : J'en fait six avec.

—Six quoi?

—Six lards²⁰⁾

「脱帽しろ、おれはこれで6つも作った」「何を?」「この道具で6人の子供を作ったのさ」

—Vous nous en ferez d'autres par douzaine, polisson!

Mathieu détourna les yeux :

—Tire ton chapeau, l'apprenti! cria Latex en colère.

—Je n'ai pas de chapeau, dit Mathieu.²¹⁾

「自分はあと1ダースばかり作る。脱帽しろ、助平野郎!」「私は帽子などかぶっちゃいないよ」と言ってマチウはその場を去る。

労働者階級の兵士とマチウ（サルトル）の持つ雰囲気の違いは厳然と存在しているのだが、分けても大きな相異は両者間に広がる倫理観ではなかろうか?そこには倫理的潔癖性の濃淡が明瞭に表われている。

サルトルは1929年、誤って気象班という楽な部署につかせてもらった事実を恥じていた。

《Parce que j'ai commis en 1929 la faute de me faire embusquer à la météorologie, c'était une saloperie, je le reconnais.》 Pieter :

《Ha! Ha! tu es donc un salaud!》²²⁾

“あれは破廉恥な行為だった。認めるよ”と言うサルトルに対して
 ピエテールは“お前は下司野郎だ”とののしる。

《Sais-tu à qui tu ressembles? A ce type qui avait volé un morceau
 de chocolat et qui, huit jours après, le mange avec plaisir en
 disant : je suis un voleur, un salaud, j'ai des remords.》

ピエテールは畳み掛けて“お前はチョコレートを盗んで一週間後に自
 分は泥棒だ、下司野郎だ、後悔していると言いながらも喜々としてそ
 れを食べる、そういうタイプの人間である”と言う。また更に、

《Moi je suis plus franc que toi, je me suis fait pistonner, je suis
 satisfait du résultat...》

“私はお前よりずっと正直だ。私はコネを使って気象班に配属され
 た結果に満足している。”対してサルトルは反論する。

Moi : 《Je ne sais pas pourquoi tu appelle ça de la franchise : tu te
 caches que tu es un salaud.》

Pieter : 《Je ne suis pas un salaud. Ah! dans une société où régnerait
 la justice, si je commettais une injustice à mon profit, je
 pourrais avoir des remords. Mais dans ce monde-ci, je me dis que
 je ne suis pas une exception, qu'il y a cinq cent mille pistonnés
 comme moi et que si je n'étais pas à cette place, un autre y serait.
 Tandis que toi tu dis que tu es un salaud, c'est plus habile, mais tu
 profites comme moi des avantages de la météo. Un type qui
 dirait : je suis un salaud et puis qui refuserait ces avantages, qui
 partirait s'engager dans la biffe, celui-là, je dirais qu'il est
 sincère. Mais qu'est-ce qui me prouve que tu es sincère?》²³⁾

サルトルは“私には君がそれを正直という意味が理解できない。君は自分が下司野郎であることを認めたくないだけだ”と言り返す。ピエテルは“私が下司でない理由は、正義が支配する社会であれば、自分の利益のために不正を犯すことで後悔することもあるだろうが、現代社会では私は例外的存在ではない。自分のようにコネを使った人間は50万人もいるのであって、万一自分がこのポストに居なくても誰かがここに居すわるだけのことだ。サルトル、君は自分を破廉恥な奴だと言うが、君もやはり私と同様気象班の特権を利用している。その特権を拒否して歩兵にでも志願するというのであれば、私も君を誠実と認めるだろう。しかし、君が誠実であることを一体誰れが証明してくれるというのか？”

以上、サルトルが非難するピエテルの行為は一重に彼が有力者のコネを利用した事実にある。そしてそれは純粹にモラルの、個人的モラルの問題であろう。

結局サルトルはこのピエテルとの対話のエピソードを次のように締め括っている。

Sur Pieter. Il apparaît à la lumière de cette conversation comme le plus beau spécimen du rationalisme inauthentique, très exactement du 《on》 heideggerien²⁴).

“彼は非本来的合理主義者、ハイデッガー的《ひと》das manの最も見事な見本である”と結論する。

この時代サルトルは *Eigentlichkeit* 「本来性」の思想に執着していた、もしくは縛られていた、或いは魅入られていたといえる。authenticitéと inauthenticité：「本来性」と「非本来性」という〔二項対立〕の世界観であらゆる現象を透視するやり方である。サルトルがドイツ留学時代に影

響を受けたハイデッガーに吹き込まれた本来的自己〔実存〕の回復という観念の基盤を為す性格は、

Individualité perdue dans le «on», relativisme social et tolérance universelle, rationalisme de politesse, cécité aux valeurs, voilà le fond de son inauthenticité²⁵⁾.

中性化乃至平均化された「ひと」《on》：《Das man》：《untel》の中に埋没した個別性，社会的相対主義，あらゆるものの許容，儀礼上の合理主義（『異邦人』のムルソーが拒否したもの），価値への盲目等を「非本来性の基盤」とするものに逆行する，乃至は対蹠的位置にあるものである。加うるに、

Choc désagréable. Vis-à-vis de Gauguin, Van Gogh et Rimbaud j'ai un net complexe d'infériorité parce qu'ils ont su perdre, (...) Je pense de plus en plus que, pour atteindre l'authenticité, il faut que quelque chose craque. C'est en somme la leçon que Gide a tirée de Dostoïevsky...²⁶⁾

サルトルは本来性に到達するためには何かが破綻しなければならないと考える。ゴーガン，ゴッホ，ランボーに対する彼の劣等感はこのようにした芸術家達がおのれを破滅させえたからなのだ。彼らはあらゆるものを許容することなく，つまり許容範囲は極めて限定され，儀礼上も極めて不合理（世間体に合わせてをせず）で，相対主義を否定（絶対主義を貫き）し，己のみが信奉する価値にまっしぐらに突き進んだ芸術上の闘士であった。

ハイデッガーの *Sein und Zeit* 『存在と時間』から得た「沈黙の呼び声」，良心の呼び声は，自己を《ひと》から連れ戻し，現存在に「負目目」Schuldを理解せしめるものとして機能するものであり，具体的にはわれわれが「死への存在」Sein zum Todeであることを了解せしめるもの，すな

はち現存在の「虚無性」Nichtigkeitを認識せしめるものである。ハイデッガーは「自己固有の負い目あることに対して、沈黙のうちに、不安に身構えて自ら投企すること」を「決意性」Entschlossenheitと呼び、これが“本来性”の証明であるとする。つまり、現存在の本来性は「良心」と「決意性」であるというものである。また、L'authenticité exige qu'on accepte de souffrir, par fidélité à soi, par fidélité au monde²⁷⁾. 本来性は自己への忠実、世界への忠実故に苦悩を受け容れることを要求するものでもある。社会的相対主義を排し、儀礼上の合理主義や価値への盲信をしりぞけて、個人の「心奥」が呼びかける沈黙の声に耳を傾けた結果として、自己破滅に至る行程にイメージとしての「本来性」の姿をサルトルは見ていると言えよう。

こうした「本来性」への強烈なるこだわりは「正義と善」の過激な追求となり、妥協を許さぬ純粋志向へと人を駆り立てるのである。『汚れた手』の一方の主人公ユゴーはまさにそのようなサルトルの一面を付与された、使命と倫理的正義のはざままで葛藤・煩悶する知識人の典型と見ることができる。

V

ところでTzvetan Todorovは*L'homme dépaysé*の第7章Politique des intellectuelsの項で興味深い論旨を展開している。暫時その言に耳を傾けてみたい。

アメリカ人哲学者にして社会学者Christopher Laschによる知識人の類型分類から彼は説き起こしている。それは歴史の3つの時代に照応する知識人の役割である。l'intellectuel comme voix de la conscience：良心の声としての知識人、次はcomme voix de la raison：理性の声としての知識人、最後はcomme voix de l'imagination：想像（力）の声としての知識人である。第1のケースは最も古いタイプでモラリストがこれにあたり、伝統と宗教を拠り所としている。2番目はモラリストに対抗する啓蒙主義時代の知識人である。3番目はその啓蒙思想の学者に対抗して産まれた口

マン主義的反抗に照応する知識人である。そして、この第3のタイプの知識人は *il s'incarne dans le marginal, le poète maudit, l'artiste*²⁸⁾ 社会のはみ出し者、呪われた詩人、芸術家の姿をとっている。更に、*Chacun se place donc sous une bannière différente : le bon, le vrai, le beau.* 夫々の時代の知識人の旗印は〔善〕〔真〕〔美〕であると。ラッシュは倫理的言説に関して科学的理性や解放のロマン主義的夢想よりむしろ、知識人が良心に注意を向けるモラリストのタイプを称揚する。トドロフは *son refus de sacrifier les valeurs éthiques à quelque autre catégorie* 他のカテゴリーの為に倫理的価値を犠牲にすることを拒否するラッシュの姿勢に賛同する。

*L'artiste en tant que tel, le savant en tant que tel n'ont pas de leçons de morale à nous donner ; ils ne sont pas sages que le citoyen ordinaire*²⁹⁾.

その訳は、芸術家や学者はそれ自体として確固たる道徳的教訓を有しているわけではなく、彼らが一般市民以上に賢明というわけでもないからである。

また、トドロフは *La tentation de l'utopisme* 「理想郷主義への誘惑」の項でこう語る。

Ce sont là deux rôles opposés : l'intellectuel comme maître en lucidité et l'intellectuel comme pourvoyeur d'espoir. 明晰なる指導者としての知識人と希望の供給者としての知識人がある。そして、*les préférence de Sartre vont à la seconde position* サルトルの好みは後者の立場、つまり希望の供給者としての知識人であって、*La démarche ici défendue est celle de l'utopisme* 拠って立つところの主張は「理想郷主義」に他ならない。理想郷の考えはプラトンからルソーまで常に存在したが、その考えの役割は、世界を解析できるように精神を教育することにあつたのであり、明日の行政官にプランを提示することではなかったと語る。

またトドロフはアロンとサルトルを比較して、*d'un côté le pur idéologue, qui décide finalement de tout en fonction de ses choix*

affectifs, de l'autre le spécialiste, le savant qui a appris à se mettre à l'écoute des faits³⁰.サルトルは純粋なイデオログで感情的な選択ですべてを決定するが、アロンは事実に耳を傾けることから始める学者であり、両者共にモラリストではあるが、Leurs morales, cependant, n'ont pas même origine.彼らの倫理的姿勢の起源に違いがあると言う。つまり, Sartre a, en dernière analyse, celle du croyant qui adhère aveuglement à un dogme ; Aron professe une morale rationnelle, fondée sur l'idée de l'universalité humaine et maintenue par le débat argumenté.サルトルには詰まる所ひとつのドグマに盲目的に固着する信者の姿勢があり、アロンには論拠によって立証された論争に支えられた人間的普遍性の観念に基づく合理的なモラルがある。アロンにとって事実の確認が果たすべき第一歩であるのに対して、C'est pour cette raison que Sartre se soucie peu des faits.サルトルが事実に殆ど関心を持たないのはそうした理由による。

また, Telle est l'énigme 洵に不思議なことだがと前置きした上で, alors que depuis deux cents ans les pays occidentaux se sont engagés sur la voie de la démocratie, voie choisie majoritairement par l'ensemble de la population, les intellectuels, qui en sont en principe le segment le plus éclairé, ont plutôt opté pour les régimes violents et tyranniques.³¹この200年西欧諸国は大多数の人に選択された道, 民主主義の道に踏み入れていたのに, 最も見識ある人々であるべき知識人はむしろ粗暴で専制的な体制を選んできた。Ces dernières années, l'attention a été attirée sur le cas de Heidegger et de plusieurs de ses admirateurs et disciples, qui avaient adhéré, avant ou pendant la Seconde Guerre mondiale, aux idées du nazisme.近年ハイデッガー, 彼の崇拜者またその弟子に注目が集まったが, 彼らはナチズムに賛同する人達であったし, un nombre probablement supérieur d'intellectuels se sont dévoués corps et âme à l'une ou l'autre variante du marxisme politique: stalinisme, trotskisme, maoïsme, castrisme...³²数多の最高級の知識人達が身も心

も捧げてきたのは政治としてのマルクス主義のヴァリエント、つまりスターリン主義、トロツキー主義、毛沢東主義、カストロ主義或いは一時的とはいえミシェル・フーコーが支持したホメイニの体制等に対してであった。

どうしてこのようなことになるのか？謎解きのひとつをトドロフはジョージ・オウエルの言に求める。1940年代、大戦前夜のイギリスにおいて一般市民の方は彼らの自由を愛し善悪の实在を信じ、知性を尊重したが、知識人はそうした《形而上学的虚構》の仮面を剥ぐことに汲々とした結果、*Le résultat est que ces derniers pratiquent la complaisance à l'égard du facisme et, plus encore, du stalinisme ; alors que les gens communs savent qu'il faut combattre Hitler*³³⁾. 一般人はヒトラーと闘わなければならないことが分っていたが、知識人はファシズム、或いはスターリニズムに迎合的な態度をとってしまった。その理由は、彼らが一般人よりも精神的領域で天分に恵まれているが故に、*Ils tentent d'arriver au pouvoir par la force de leurs seules capacités intellectuels ; or la démocratie est moins propice à cette fin que la tyrannie*, 彼らは知的能力のみの方で権力の座に到達しようとするからである。しかし、その目的に対しては専制政治が民主主義より都合がよいのである。《必要不可欠な殺人》を称讃する人々とは、間近に死体を見たことのない人でもある。1930年代のマルクス主義の詩人 Auden がそうであったように、《*Cela ne peut être écrit que par une personne pour qui le meurtre est essentiellement un mot*》³⁵⁾ そうした作品は、殺人が何よりもまづ言葉でしかないような人間によってしか書かれ得ないものなのである。

要するに、*les intellectuels, les écrivains, les artistes ont commencé à appliquer systématiquement des critères esthétiques au domaine de l'éthique et de la politique (C'est le règne de l'imagination selon Lasch)*³⁶⁾. 知識人や作家、芸術家達が倫理的、政治的領域に美的な判断基準を体系的に適用し始めたことにその原因があるとトドロフは見ている。ラッシュによれば、それは想像力の君臨であり、ポール・ベニシューはこ

れを *le credo romantique* と表現している。つまり、問題は“ロマン主義的信仰箇条”ということである。

イギリスのロマン派詩人 Percy Bysshe Shelley は *les poètes seront les législateurs de l'univers* (Shelley) “詩人は宇宙の立法者となる”と語り、《*la beauté sauvera le monde*》(Dostoïevski) ドストエフスキーは“美が世界を救う”と言い、《*l'esthétique est la mère de l'éthique*》(Joseph Brodsky) ³⁷⁾ブロードスキーは“美は倫理の母なり”と表現した事実が以上の経緯を物語るといえよう。

結局、ロマン主義的想像界ではどうあれ、現実世界では“絶対悪”“絶対的善”というものは殆どないのである。従って知識人はむしろ“より善きもの”次善に向って進むべきなのではなからうか？倫理や政治に美学がとって代わることで一体如何なる実践的效果が見込まれるであろう。理想郷主義を鼻先にぶら下げられて、戦争の美学、暴力の美学に酔い痴れてきた200年があったが、われわれは《現実は醜いもの》と言うニーチェの言葉を再認識した上で“美しい嘘に乗せられるよりは、醜い辛い真実を認識する”方がよいのではないか？現実世界では節度のみが美德であり、過激主義はそこではなりをひそめざるを得ないであろうが、*lumière* 知性を基調とした18世紀の理性第一主義に対しても、人間理性の限界性の声も囁かれる現在、更には美に酔い痴れる想像力の行き過ぎが招来する危険性をも謙虚に受け入れるとすれば、17世紀の時代に全面的に立ち返ることは不可能としても、モラリストの *la voix de la conscience* 良心の声に学ぶべきことは多々あるのではなからうか。

VI

『ボードレール論』や『言葉』から窺えるサルトル固有の性癖は多分に彼の生いたちが形成したものと見られるが、われわれもサルトル流の実存的精神分析の方法を借用して、彼の人格の側面に光をあててみたい。

端的に言って彼の“純粹”指向は幼少時の「プチ・ブルジョワ育ち」「孤兒的境涯」「書物に囲まれた環境」「都市生活」等が作り上げたものと見

ることが出来るのではないか。

C'était le Paradis. Chaque matin, je m'éveillait dans une stupeur de joie, admirant la chance folle qui m'avait fait dans la famille la plus unie, dans le plus beau pays du monde³⁸).

美しい母と営む生活世界は天国であり、彼は毎朝喜びにうっとりして目覚めるのであった。Je m'étais pris pour un prince. サルトル少年は自分が enfant public 皆からちやほやされる王子様と思うことのできる坊ちゃんであった。そして彼が11歳の折りの母親の再婚は彼の心中に決裂、縁切りの感情を誘発し、彼は母との断絶に由来する『他者性』をたっぷり味わうことになるのである。

ブルジョワ的環境という天国から孤兒的境涯へ投げ出された少年はますます文学という想像世界にのめり込んでゆく。この間の経緯については関西大学文学論集第33巻第3号の拙論『「他者」意識の〔実在〕と〔非実在〕』で詳細な報告をご覧いただきたいのであるが、ボードレールの場合は偶像であった母との近親相姦的な関係が壊れ、自らを「他者」に仕立て上げ、同時に自らの他者性を屈辱と怨念と自負のうちに回復する攻撃的な言動へと彼を追い立てたのである。天国に住まう「坊ちゃん」はいわば ange 天使とも言えるのだが、paradis から追放された天使は ange déchu 墮天使となり、更には ange rebelle 反逆天使となり、最後に ange des ténèbre 闇の天使、すなわち悪魔となってゆく経過を辿ったのである。

因みに「悪魔」とは元来神の傍らに仕えて罪人の罪状を調査し、所業が正義に適うものかどうかを「神」に奏上する役目を持った天使であった。従って悪魔は「正義」「善・悪」に対する鋭利な感覚を養い続け、その純粋すぎるノルマ故にまことに些細な不備も見逃すこと出来ぬ偏狭な正義感を振り回す「悪魔」となるのである。

『赤裸の心』でボードレールは「身だしなみ」「祈り」「仕事」「節制」「純潔」「慈愛」等を自らに課し、道徳的に厳格な生活を送ろうと努めている様が窺える。それらを日々完璧に全うすることの困難故に悔恨にさいなまれながらも、より良い生活をしようと毎日自分に言いきかせ、闘っ

ては敗れ、人知れぬ過失の重荷を負いながら恐ろしい罪悪感に苦しめられていた。正義と善への執着は他者のみならず自分にも向けられるのである。サルトルが、社会的現実や人間関係を眼差しの闘いという相互主観性を通してしか見ようとししないのもこうした事情によるのではないか。

サルトルとボードレール、二者に共通する性癖は Angélisme である。Angélisme 天使主義とは Ange 天使から派生したタームで「現実を無視した純粹主義」「お目出たい精神主義」「現実を回避する態度」を意味する。中空を軽やかに舞い、純粹で精神的なものを希求する angélisme は、ひとたび険しい現実と直面した時、現状に耐えられず墮天使となり、一方で物質嫌悪、現実回避に向かう。「人間の行動はかくあるべし」の信仰箇条がまず措定され、それが理想的軌道はずれる時、彼の完全主義的性癖は自他に対する攻撃の刃となり、他者に対してはその不備を突き、自らに対してはその韜晦故の罪悪感から、ボードレールの場合には麻薬という「人工樂園」への逃避を促す契機となったと考えられる。

また、『言葉』で語られているように、「書物に囲まれた環境」は、祖父の教育とともにサルトルを現実よりも文学、つまり架空の世界を好む人間に仕立て上げるのに寄与したと考えられるし、加えて、祖母ルイズの清教徒主義の影響も無視することは出来まい。ピューリタニズムは過酷な厳罰政策によってジュネーヴを治めたカルヴァン主義のヴァリエーションでもあるからだ。

VII

「正義」「善」「本来性」等へのこだわりはいわば「純粹主義」に発している。

HOEDERER

Tu vois! tu vois bien! Tu n'aimes pas les hommes, Hugo. Tu n'aimes que les principes³⁹).

『汚れた手』の主人公の一人エドレールはインテリ青年 Hugo が愛するものは原理原則のみであり、彼が人間を愛していない事実を指摘してい

る。ユゴーは人間を愛する為に黨員になったのではない。

HUGO

Je suis entré au Parti parce que sa cause est juste et j'en sortirai quand elle cessera de l'être. Quant aux hommes, ce n'est pas ce qu'ils sont qui m'intéresse mais ce qu'ils pourront devenir⁴⁰⁾ .

ユゴーはその主張が正しいから入党したのであって、そうでなければ脱党する意志を表明し、更に、人間に興味があるとはいえ、あるがままの人間にではなく、なりうる人間に対してである。ひとつの主義主張に基づく理論に合致した、理想形としての人間の姿にこだわるインテリの dogmatisme がここにも窺えるであろう。あるがままの人間は理想とは程遠く、不完全で不備だらけの存在でしかない時、純粋に過ぎる倫理観はこれを包容する能力に欠けるのかも知れない。

Sur la destruction des jésuites en France の卓越性を称讃しつつ、ヴォルテールは ouvrage impartial, parce qu'il est d'un philosophe, écrit avec la finesse et l'éloquence de Pascal, et surtout avec une supériorité de lumières qui n'est pas offusqué, comme dans Pascal, par des préjugés qui ont quelquefois séduit de grands hommes⁴¹⁾. パスカルに見られるような dogme の招来する偏見を批難している。ある意味で、宗教戦争を和解に導くに功あった大政治家モンテーニュ以来、主義主張・信条という名の偏見と、不完全なあるがままの人間の孰れを優先すべきかの二者択一をわれわれは今日まで問われ続けているといえる。

劇作『汚れた手』に関しては、一方の主人公エドレールというキャラクターの創造にサルトルの手腕の冴えを見るのが一般評ではあるが、これまで見てきたように、そのキャラクターを引き立てるための二項対立のもう一方の軸が、純粋な倫理観の権化として、政治の現実主義と道徳的理想のはざままで煩悶するユゴーの設定である。かくして、このドラマでは〔知識人 vs 労働者〕〔エドレール vs ユゴー〕、そしてそれらを包摂するものとしてユゴー自身の人格内部の dualité の抗争と、3セットの対立の構図が用意されているのだが、ユゴーはある意味で、サルトルの純粋主義を担う人

物像と看做することができるだろう。「良心の要請と政治的行動の要請」「倫理と実践」「知識人と大衆」「現実世界と理想論」、こうした二項対立はサルトルの思想的論理形成の常套手段で、彼の最も得意とする手法であるが、その手法が17世紀以来の古典演劇の作劇作法にぴったり合致した好例とも言えよう。あるべき存在としての自分＝〔対自〕と、革命推進の手先としての自分、他者から見た、他者との関係の渦中にある、いわば自己の対他存在を引き受ける自分＝〔対他〕の相克は必ずしも劇中で止揚される必要はないのである。dramatiqueを演出するものはその相克から生じる煩悶であり葛藤であるからだ。敢えてそのジレンマを挙げるとすれば、それは主人公ユゴーの自殺ということになるであろう。こうした演出はすべてサルトルの文学技法上の計算の上に成立したものである。アンナ・ボスケッティが『知識人の覇権』⁴²⁾で語っているように、“サルトルは今何をすると流行児になれるかを計算しながらの上り上りしてきた。彼は今自分のいる所で何をすれば1番になれるかを常に考えてそれに成功した” そうした計算に対する努力・尽力を惜しまぬ性格の持主である。『汚れた手』の作劇構成を概観すれば、彼が当作品の執筆にあたり、如何に綿密に古典主義の演劇を精査し、その作法に忠実な創作を心掛けたかは一目瞭然である。例えば、この芝居はユゴーの回想に始まり、その3時間の回想が終るとともに芝居も幕をおろすという時の一致を実践しているほか、17世紀古典演劇の金科玉条である三単一を見事に復活させているのである。いかなる理論の正統性もゆるがせにできぬサルトルの純粹への憧れは、本来性への傾倒と軌を一にするものといえるであろう。

とはいえ、ユゴー的キャラクターの効果的描写は、そうした計算を越えるものと考えざるを得ない。このキャラクターの創造にはサルトル自身の性癖が関与している事実は、これまでの経緯からして納得されるところではないであろうか。 Kommunismusを非難・批判しつつも Kommunismusと共に歩むという綱渡りのような生き方をスタンスとして採用せざるを得なかったサルトルの本領は、果して小説・演劇の世界に求められるべきであろう。本来性という理想型にこだわり、純粹主義的倫理観の横溢した彼の

ロマン主義的性格は、ひとつの理想に邁進する dogme を追求する余りに対社会的現状認識や調査をないがしろにする性質のものであったようだ。レーモン・アロンと比較されるのはその点であり、サルトルの政治的発言のアキレス腱もそこにあると言える。

ハイデggerと子弟関係にあつて長年に渡つてその師と往復書簡をとり交わしたハナ・アーレントはその著『全体主義の起源』に於いて、「強制収容所および絶滅収容所は... 全体的権力機構・組織機構の中核的機関なのだ」⁴³⁾として、その体制内部の恐怖政治と強制収容所の残虐行為の実情を詳しく調査し、そうした機関の存在の意味を追究した。

Sartre se soucie peu des faits, alors que leur prise en compte est le premier pas obligé dans la démarche d'Aron⁴³⁾.

現実世界のあるがままの姿、つまり事実の調査と把握を重視することが、政治的発言に求められる作業の第1歩であるとするれば、それはサルトルの資質が十全にカバーすることの出来ない部分であると言えよう。よつて、彼の本領はやはり文人の領域にあると考えざるを得ないであろう。

以上

猶ほ、本稿は平成15年度関西大学文学部共同研究費の助成の成果であることを、感謝の意を込めて一言付記致します。

(本学教授)

注

- 1) 例へば王位にのぼつた伯父クレオンの命に背き、兄ポリニスを埋葬するアンチゴネには政治的立場を配慮する気持とそれを凌駕する倫理観の、二者択一を迫られる葛藤があつたであろう。
- 2) Jean-Paul Sartre, *Situation*, VII, Gallimard, 1965, p.307.
- 3) *ibid.*, p.233.
- 4) *ibid.*, p.250.
- 5) *ibid.*, p.250.
- 6) Jacques Derrida, *pourquoi pas Sartre*, 『現代思想7』, 1987, p.80.
- 7) Tzvetan Todorov, *L'homme dépaycé*, Seuil, 1996, p.29.

- 8) *ibid.*, p.30.
- 9) *ibid.*, p.30.
- 10) *ibid.*, p.30.
- 11) *ibid.*, p.31.
- 12) *ibid.*, p.33.
- 13) *ibid.*, p.34.
- 14) *ibid.*, p.33.
- 15) *ibid.*, p.33.
- 16) *ibid.*, p.140.
- 17) John Gerassi, *Sartre, Conscience haïe de son siècle*, Edition du Rocher, 1992, p.49.
- 18) Geneviève Idt, *Sartre romancier ; lectures actuelles de l'œuvre romanesque de Sartre*, 平成12年(2000年)11月28日, 関西大学に於ける Geneviève Idt 氏招聘講演会要旨より。
- 19) J.-P. Sartre, *Carnets de la drôle de guerre*, Gallimard, 1995, p.188.
- 20) J.-P. Sartre, *La mort dans l'âme*, Gallimard, 1949, p.110.
- 21) *ibid.*, p.110.
- 22) *Carnets de la drôle de guerre*, p.188.
- 23) *ibid.*, p.189.
- 24) *ibid.*, p.192.
- 25) *ibid.*, p.196.
- 26) *ibid.*, p.214.
- 27) *ibid.*, p.241.
- 28) *L'homme dépaysé*, p.136.
- 29) *ibid.*, p.136.
- 30) *ibid.*, p.140.
- 31) *ibid.*, p.141.
- 32) *ibid.*, p.140.
- 33) *ibid.*, p.141.
- 34) *ibid.*, p.142.
- 35) *ibid.*, p.142.
- 36) *ibid.*, p.144.
- 37) *ibid.*, p.144.

- 38) J.-P. Sartre, *Les Mots*, Gallimard, 1960, p.24.
- 39) J.-P. Sartre, *Les Mains sales*, Le livre de poche, 1967, p.201.
- 40) *ibid.*, p.202.
- 41) Voltaire, *L'Affaire Calas et autres affaires*, Gallimard, folio, 1998, p.191.
- 42) Anna Boschetti, 『知識人の覇権』, 石崎晴己訳, 新評論, 1987年。
- 43) Hannah Arendt, 『全体主義の起源』 3, 大久保和郎・大島かおり訳, みすず書房, 2003, p.232.
- 44) *L'homme dépaycé*, p.140.